

心はずむ創造的表現を目指した学習の工夫

奈良県立教育研究所

研究指導主事 中川 賀照

Nakagawa Yoshiteru

要 旨

これまでの立体造形指導では、粘土を使って対象物を直接スケッチするという実践例はあまり見られなかった。本研究では、これらの方法を用いて行った生涯学習での実践をもとに、その有用性を探るとともに、学校教育における造形指導への活用を試み、子どもたちの個性的で心はずむ創造的表現の実現を目指した。

キーワード： 図画工作科・美術科教育、粘土によるスケッチ

1 はじめに

最近、生涯学習の重要性が説かれる中、各地で様々な活動が展開されている。その中でも、陶芸に対する人気は非常に高い。誰もが一度は、自分で使う茶碗や湯飲みなどを手作りしたいと思われたことがあるだろう。その要求の起こりを究明することは、造形指導を進める上での重要な手がかりになると思われる。また、使用材料に起因するならば、粘土を用いた題材の設定や教材開発が非常に有効であると考えた。本研究は、生涯学習の場における実践や教育指導者の研修などを通して、学校教育から生涯学習へと一貫しながら発展する表現活動を探る。

2 研究目的と方法

- (1) 陶芸や立体造形の実践例から興味や関心の起こりについて考察する。
- (2) 「粘土によるスケッチ」の有用性を提起し、教材化を試みる。

3 研究内容

- (1) 陶芸制作に熱中する理由は

ア 作り手の力量に応じて、粘土の方から寄り添ってくれる。

粘土には不思議な魅力があって、初めての人が作ってもなんとなく形になる。というよりも、粘土が作り手に合わせてくれているようだ。あまり無理なことを要求しても叶わないが、こういう風に作りたいという気持ちさえ持っていれば、それらしい形になっていく。陶芸の面白さは、初めての人にもそれなりに、また、上達すると限りなくその目標が高まっていくことにある。

陶芸でよく制作される器は、中身がこぼれないということが最低条件であるが、形が多少いびつでも使用することはできる。もう少し勝手のよいもの、味のあるものと欲が出てくると、それまで

何の気なしに見ていた回りのものに目が向くようになり、興味が広がっていく。

イ 炎が作品を浄化してくれる。

陶芸の楽しさは、神聖な炎をくぐることによって種類の違った土が様々な色や形に変化することにある。それまで隠されていたベールが解かれ、予想できなかった驚くような色合いと光沢を醸し、普遍的で半恒久的なものへと生まれ変わる。その変化の見事さに魅了されないものはいないだろう。

ウ 実際に使えること、また他人に使ってもらえるという喜び。

幾らか思う形になってくると、使う用途に合わせてあれこれと工夫するようになるが、自分で使うだけでは飽きたらずに人の評価を聞きたくなる。使ってもらって賞賛の言葉を耳にすることができたなら、それは言い様のない喜びとなって次への制作意欲へと発展していくだろう。

(2) テラコッタクラブの実践から

三年前に、社会教育センター主催の県民講座がきっかけとなって、もの作りの好きな人達が集い月一回「テラコッタクラブ」を実施している。その活動の中から造形の楽しさについて探ってみた。

ア 陶芸活動からの発展

クラブの半数の人たちは陶芸の経験があり、自宅に窯を設置するなど本格的に取り組んでいる。同じ粘土を使った造形活動でもテラコッタは彫塑の分野に入り、形態の追求やそれらを包む空間について考えることが主な課題となる。それら両方の要素をもつものを陶塑とも言われる。

イ 感動を形にする

クラブでは互いがモデルになったり小動物や屋外へ写生に出かけて牛を作るなど、なるべく生きたものを対象として制作している。それは、対象から受ける感動を直ぐに具体化する楽しさを体験するためである。技術的には稚拙に見える表現であっても、大きな感動を伴った作品には独特の雰囲気がある。形を整えることに主眼を置くのではなく、その人が受けている感動こそを大切にしたい造形指導が必要であろうと考える。

ウ 素材性の面から

粘土が、多くの人たちを魅了する秘密はどこにあるのだろうか。粘土は湖や川などの底に土の微粒子が堆積してできたもので、古琵琶湖の信楽粘土が有名である。人の歩みとは比べものにならない長い年月をかけ蓄積されてきたのである。最近、人工の建物に囲まれるようになって土と接する機会が少なくなってきた。土は地球そのものであり、人が生きるための糧をずっとはぐくんできた。

灼熱したマグマが冷え固まって岩になり、それが雨風や太陽の光にさらされてと風化し土となる。人は自然から、火を扱うことで土を岩に帰す術を学んだ。自然界の模倣から始まった焼く技術が生活と共に発達し、ゆとりが生まれると純粋な造形芸術として楽しむようになった。土による造形活動には、精神の安定をもたらす効果もあるようだ。それは、素材のもつ原始性によるものと考えられる。

エ 集団の中で培われるもの

同じ志を持った仲間と一緒に活動をするのは、とても楽しい。一人では行き詰まってしまう場合でも、相談し励まし合いながら乗り越えていける素晴らしさがある。自分だけの発想ではとても思い付かないことを見聞きしたり、お互いに刺激を受け合うことで意欲も湧いてくる。個人で活動

する作家が定期的に作品を発表するのも、新しい刺激を求めているからだろう。ある意味では、創作活動そのものが自分のための活動であるとともに、他人への働きかけであり、作品はその姿を借りた自己のメッセージであるといえる。

オ 平面的な表現に行き詰まった人たちにとって

絵は中学校や高校までは描いたことがあるけれど、粘土は小学校以来だといわれる方が多い。また、絵に対するコンプレックスはよく聞くが、粘土のいやな思い出はそんなに聞かない。機会の少なさが素材の新規性を感じさせる良い作用となったり、その特性に慣れることに精一杯で技巧的な表現にまで達しないことが原因しているのだろう。私には、そのことがかえって粘土による表現を素直なものにさせているように思える。また、表現の原点に立ち戻ることもとなり、平面的な表現技法に行き詰まってしまった人たちにとっての一助となるだろう。

カ モデルを見ないで作る人たち

モデルを使っても、ほとんど見ないで作っている人がいる。対象が立体なので、一面的な見方では形が決まらないことや多面的に捉えることの難しさからであろう。見えたものを頭の中で解釈する時間が必要なのである。しかし、そのようにしてできた作品からは作者の意図がはっきりと感じられるものが多い。これをうまく使うと、どうしても細部の表現に捕らわれてしまいがちなときなどは、あえて見ない時間を作ることによって主題を明確にすることができるようだ。作家にも、自分の持っているイメージを大切にするため、絶対に写生をしないという人がいる。

(3) スケッチについて

スケッチとは、短時間でいう素描が広義である、下絵を作成するためにアイデアを練るときにも使われる。ここでは、それらの方法が造形表現においてよく用いられる理由を考えてみた。

ア 鉛筆と紙が主な描画材なのは

どちらも入手が容易で様々な種類のものが開発されており、表現に応じて多様な描写が可能である。なんととっても手軽で、筆記用具としても便利なこれらが使われるようになったのも頷ける。

イ 二次元への変換が生み出す苦手意識と弊害

私たちは、三次元の世界に存在している。目に映る風景、人物や静物も同様である。平面の紙にそれらを描くということは、二次元に変換して表すということである。これまで立体的に見えるようにするために様々な工夫がなされてきた。よく知られている透視図法や陰影法、線描写法、空気遠近法、色彩遠近法などがある。しかし、あまりそれらの知識的な習得にこだわると、本来自由なはずの表現を妨げることになってしまう。描写に苦手意識をもつ人の大半が、この変換時のつまずきによるものと考えられる。

(4) 「粘土によるスケッチ」の考え方

ア 三次元に時間軸をプラスする

三次元の間の変換をスムーズに行うには、更に一つ高い次元を意識する必要があるだろう。私は、それを時間軸と考える。四次元という言葉はよくSF（サイエンスフィクション）で耳にするが、ここでは物質をその次元に置換するというのではなく、思考を四次元的にもつという意味である。平面でのスケッチは三次元の思考で可能であるが、三方向の視点が要求される立体造形では、その一つ上での考え方が必要だと思う。立体造形とは、視覚的な三次元の像を時間的な思考によって関連付け、具現化する行為と考える。

イ 多面的な視点から観察する

視点の移動から起こる新鮮さと複雑さが、飽くなき探求心を芽生えさせ、集中力を増加させ、量的な形態への追求心へと深化させる。立体作品は視点の移動によって様々な表情をもつ。更に、光が作用するとその見え方は無限である。それは制作の途中にも言え、モデリングの際は常に近隣との連続性と、反対面の量的なバランスを意識しなければならない。その際、モデルと作品と制作者の視点が同一線上に位置するように注意する。いずれかにずれが生じると、それらを正しい視点に変換するときに非常に複雑な思考を要することとなる。

ウ 粘土造形の効用

粘土を手で造形に熱中していると、ふと、心のもやもやが抜けていくように感じることもある。粘土を付けたたり削ったりする行為は、人との対話に似ている。それらがスムーズに進むと、コミュニケーションが図られたときのように心が軽くなる。粘土がカウンセラーの役割を果たしてくれているようだ。素晴らしいカウンセラーは、自分の意見や考えを決してひとに押しつけず、ただひたすら相手の気持ちを聞くことに徹すると聞いた。そういう意味では、粘土はこれ以上ない存在である。しかも、具体的な形で患者の精神状態や悩みを第三者にも理解できるようにしてくれる。臨床心理で行われる箱庭療法に似た効果があり、研究の余地が十分にあるだろう。

(5)「粘土によるスケッチ」の具体的な進め方

写真の作品はどれも個性的で、それぞれのものの見方や考え方が端的に現れて興味深い。技術的な旨い下手を越え、素直な作者の感情や心の動きを作品から感じ取ることができる。これらの制作の具体的な進め方を以下に述べる。

ア 動くものを作る場合

対象が動物などのように動くものは、完成のイメージに基づいて部分の形や動きを追う方法や、部分から全体形作る中からその特徴を捉えていく方法などが考えられる。短時間で形を捉えることができる面白い練習方法を紹介する。自分自身がカメラになるのである。耳を持って、「カシャ」と言いながら引っ張り、目で対象物の距離を測ってピントを合わせ、3秒間じっと見つめる。露光が終わったら耳を離してシャッターを閉じる。目をつむったときに、網膜に今見たものの特徴をしっかりと焼き付けて静かに目を開ける。イメージが鮮明になるまで何度か撮影を繰り返し、現像をする。ここでいう現像とは、粘土による制作のことである。この方法は、モデルと作品を交互に見ることによって集中力が分散して感じる時や、制作の意図をより明確化する場合に効果的である。

イ 動物は人を和ませる

人との付き合いに疲れたとき、動物のあどけない仕草や無邪気さに心和むことがある。精神的な抑圧は人間関係の中でよく生じる。不登校の子どもたちと「粘土によるスケッチ」をしていて思ったのだが、小動物、特に動物の子どもには病んだ心を解放してくれる力があるようだ。動物の子どもは愛らしく作られていると聞いたことがある。子孫を残すためにそのように淘汰されていったというのだ。それを目にするると誰もが穏やかでやさしい気持ちになる。大切にしたい、守ってやりたいという相手を思いやる気持ちは、自分のことで精一杯の内はなかなか起こらない。動物を仲介す

ることによって人間関係の修復を図ることができるのではないかと思う。

造形的な観点から見ても、動物のしなやかな肢体となめらかな動きは見ていて飽きない。それらの形態は流線的で美しく、野生に近いほど躍動感があり、造形の重要な構成要素であるムーブマンが全身に在る。人のように動物にもそれぞれの個体の特徴があるのだろうが、生きることの素直なその姿を見ていると、私たちのように知識が先行したよけいな悩みとは無縁であるかのようだ。

(6)「粘土によるスケッチ」を生かした指導案と教材づくり

ア 図画工作科での指導例

幼稚園や小学校では、よく校庭や教室で動物を飼育している。子どもたちは、その世話をすることによって生き物の命について考えるようになる。絵画の指導ではそれらを題材とした例が多く見られるが、ここでは粘土で行う指導の一例を示す。

「動物を粘土でスケッチしよう」 対象：中学年～
砂を一割混ぜた粘土を、ひと握りの大きさに丸めて、5～10個程度作る。毎回何らかのテーマを設定して、一回について5～10分位の時間で次々と粘土によるスケッチを進める。

「寝そべる」、「獲物をねらう」、「くつろぐ」、「じゃれあう」などのテーマが考えられる。粘土が小ぶりなので手の中で形作ることが可能である。接地面が少ない複雑なポーズも、自重でひしゃげる心配が少なく、厚みの気になる箇所は二つに割って中を空洞にするか、串などで目立たないところに穴を開けて空気を逃がす工夫をするとよい。立ちポーズのときは、竹串や割り箸などを突き刺して補強し、水分が抜けて粘土の強度が増した頃合いを見計らって抜き取る。焼成すれば丈夫になるので接着剤などで固定する。

イ 美術科での活用

中学校では小学校に比べて粘土を使った指導が極端に少ない。小学校の中学年を過ぎると写実的傾向が強くなり、周りの指導や評価もそれを基にされることが多い。先に述べた、平面に変換するとき起こるつまずきによって、多くの生徒が造形活動そのものから遠のいてしまう状況の中、この「粘土によるスケッチ」を導入することによって、既成概念にとらわれない新たな表現の楽しさを実現できると考える。最初たどたどしかった手の動きが徐々に活発になり、それとともに真剣な眼差しに変わっていく生徒たちの姿を見てきて、この方法は創造的な表現を喚起できる有効な手段であると確信した。次に、題材の選択に大きく影響するのが施設設備であるが、特別な場所や材料・用具を必要としない。また、それぞれのペースで進めることができ、自分が必要とする力を体験を通して得られる。それが生きた力となって次の表現へと発展していくようになる。

ウ 作品の保存

粘土制作の問題点は、保存をどのような方法で行うかである。最近はいろいろな粘土が市販されているが、乾燥させてそのまま保存できるのはよいとして、土粘土の場合は焼成する方法が最も適していると思う。以下に、煉瓦ともみがらを使った簡単で安全な焼成方法を紹介する。

《 準備する物 》

- ① 赤煉瓦100個 ② もみ殻10kg ③ 藁一束 ④ 泥か砂バケツ一杯 ⑤ 金網90cm四方
⑥ 鉄板か耐熱ボード80cm四方 ⑦ 木っ端10kg

《 組み立て方 》

- ① 平らな場所に八角形に煉瓦を並べて、支えの煉瓦を4個置く。(図1)
② 金網をのせ、煉瓦半分ずつをずらしながら10段を積み上げる。(図2、図3)
③ 煉瓦の隙間を泥などで埋める。

図1

図2

図3

《 焼成の仕方 》

- ① 煉瓦の透き間を空けて木っ端を燃やし、金網の上一面におきを作る。
② 隙間を塞ぎ、もみ殻を10~20cm程度入れて炎を鎮静する。
③ 作品に藁を少し巻き、重ならないようにもみ殻の上に並べる。
④ その上にもみ殻を蒔いて埋め、最上までこれを繰り返す。
⑤ 鉄板で蓋をして隙間を泥で塞ぎ、一日間、自然冷却する。
⑥ 作品を取り出す。下方の残り火に注意する。

この焼成法では、約700~800°の温度を得ることができ、縄文土器と弥生土器の中間の焼き味が出る。入れる場所によってはすすで真っ黒になるものもあり、予想できないところが面白い。

5 研究結果と考察(おわりに)

粘土による造形については、小学校の学習指導要領においても全学年を通じて重視されている。しかし、教育現場においては辛うじて低学年で取り上げられるに止まっているようだ。指導者の経験不足から、いわゆるセットものの教材に頼りがちな現状が見られる。この造形方法は、小学校や中学校のみならず広く生涯において親しめるものと確信する。この研究がそれらの進展に貢献することを期すとともに、今後は、視覚から得られた情報を効率的に量に変換する方法を模索したい

参考・引用文献

- (1)

